

特集：2009年度後期「研究授業」「授業研究会」報告

各学科から1科目を公開して授業改善を議論

2009年度後期の「研究授業」は各学科1科目の授業を公開し、参観し合ったあと「授業研究会」で相互批評や授業改善をテーマに話し合いが行われました。また、授業の様子をビデオに収め、Kio-officeの「FD info」（FDに役立つサイト）にリンクを貼って教職員なら誰でもいつでも見ることができるようにしました。授業研究会の参加者数は約30名で、決して多い数字ではありませんが、ビデオで授業を振り返り、学科や科目の特性と授業の進め方、学生との関係などについて有意義な議論ができました。高等教育支援センターの会議では、来年度から看護医療学科の3回生実習で後期にほとんどの教員が病院に張り付くということなどもあり、研究授業・授業研究会の活用について議論をしてきましたが、来年度も研究授業の意義を再認識しながら進めていくということになりました。



大学の生き残りは教育力の向上にかかっており、卒業までに学生の力をどこまで引き上げることができるかが最大のポイントです。学生が学ぶ力を最大限に発揮し、くらいついてくる授業を展開することです。そのためには、意識的・継続的な「FD活動＝教員の資質向上活動」が必要でしょう。

2009年度後期に実施した研究授業は以下のとおりです。次ページ以降にその報告を掲載します。

- ①「慢性期看護学援助論Ⅰ」：山中純瑚先生（看護医療学科）11月13日（金）
- ②「理科概論」：奥田俊詞先生（現代教育学科）11月16日（月）
- ③「生活と美術」：李 沅貞先生（人間環境デザイン学科）11月18日（水）
- ④「疫学・社会調査演習」：岡崎 眞先生（健康栄養学科）11月18日（水）
- ⑤「物理療法学」：庄本康治先生（理学療法学科）11月18日（水）

〈CONTENTS〉

- （1～4面）2009年度後期「研究授業」「授業研究会」報告
- （2面）「慢性期看護学援助論Ⅰ」「生活と美術」
- （3面）「理科概論」
- （4面）「物理療法学」
- （5面）情報センターより「USBフラッシュメモリーの管理」について
- （6面）BOOK紹介「アグリライフのすすめ」／編集後記

研究授業レポート

レポート 1

「慢性期看護学援助論」

看護医療学科 山中 純瑚

看護医療学科では、2年次から看護職をめざすための専門科目が本格的に始まります。2年次後期に開講されている「慢性期看護学援助論Ⅰ」もそのひとつであり、完全に治癒することが難しい慢性的な病とともに長期間生活を継続しなければならない成人期にある人とその家族への効果的な看護援助の方法を学ぶ科目です。

疾病の多様化・医療技術の進歩に伴い、とくに成人看護学分野においては、学生が学ばなければならない内容は多岐に渡っています。しかし、講義に費やす時間は限られており、機能障害別疾患で代表的なものや統計学的指標で今後重要となってくる疾患、国家試験に頻出する疾患、また臨床においてよく遭遇する疾患など、すべてを網羅することは困難です。学生自身の学習スタイルも変化してきている現状の中で、何をどのような方法で教授することが学生にとってより効果的であるのか、講義内容がその後の学生にとって「生きた知識」となるようにその教授方法を見極めることは、私自身にとっても今もなお試行錯誤を重ねる課題となっています。

学生が学ぶ「慢性疾患をもつ人への看護援助」は、対象となる人を理解したい、その病をもっているひとのことをもっと知りたいと思う気持ちによって主体的な学習力へと変化します。そのために本授業では、まず病をもつ対象についてできるだけ関心をもってもらえるように、授業で取り扱う慢性疾患について、新聞記事やニュース、最新の文献やデータなどから、現代社会における問題点、今後顕在化してくるだろう問題点などを取り上げることを導入方法としています。この方法は授業後に行っているミニッ



トペーパーにおいても「印象づけられた」という学生の評価につながっています。

また、看護援助を教授するためには、学生自身が人体の機能・構造や病態生理など専門基礎知識を修得していることが必須となりますが、現状ではそれは難しく、今までの既習知識を想起、確認させ、本講義との関連を明確にさせる作業を丁寧に行うことに時間を費やすことも多くなっています。学習者である学生側に立って、理解を待つ姿勢、双方向性の授業が大切であるとはわかっていますが、教授すべき内容が多い科目では、本当にその方法が学生にとって効果的であるのか悩むこともあります。授業研究会では、そのような私の抱える疑問について、多くのご意見をいただくことができました。また、当学科だけではなく、教育学部の授業工夫なども詳しくお聞きすることができました。今回の研究授業、授業研究会では、自分自身の「教育観」をあらためて振り返ることのできる貴重な機会を与えていただいたと感謝しております。

レポート 2

「生活と美術」

人間環境デザイン学科 李 沅貞

～食における色彩：色で食べる？色を食べる？～

教育学部4年次を対象とする一般教養科目「生活と美術」の授業内容と概要を紹介すると、私達は様々



な色や形によるモノに囲まれて暮らしているが、その中でも、形と色に分けて考えると、色のからだである形と、形の心である色によって生み出されるモノに対し、「美しさ」、「快適さ」、「生活デザインの条件」とは何か考え、生活に氾濫しているデザインに関する正しい基礎知識をもとに生活における美術の現状を見直し、特に色彩の観点からデザイン感性を考えることを目的としている。

第7回目の授業では衣食住の中でも、主に食における色について考える時間であった。普段、食べ慣れている、または見慣れている食べ物の色イメージは記憶色によって大きく左右される。青色のカレーライス、赤色のビールなど、見慣れてないビデオの場面から、私達は如何に色でモノを食べているのかについて考えてみた。ヒトの持つ五感の中で視覚は約80%以上に対し、味覚は1%程度を占めると言われている。また、その味覚は冷覚、温覚、痛覚、触覚、嗅覚、視覚などを融合して働くことについてもスライド資料を使って説明を行った。たとえば、視覚的な融合の例として、お弁当を一層美味しく見せる配色、料理の性格を表せるトッピングの色、企業のイメージカラー [C.I(Corporate Identity) color]、人気商品のパッケージデザインについて紹介した。また、馴染みのあるファーストフード店の看板の色を①より美味しそうに見せる看板②美味しそうに見えない看板の2パターンの色変えを行った作品を提示し、食に相応しい色とその配色について考える授業でも

あった。一方、形についてはペットボトルにおけるデザインを飲料水容器の中から提案し意見を聞いた。授業最後の10分程度の時間では、授業に対する感想、質問などを書いてもらった。

今回の授業では数多くのスライド、ビデオ再生による説明となり、できるだけ鮮明な色再現の目的から教室全体を暗く照明を落としたことによって眠気を誘うこともあり、今後考慮すべき課題となった。

レポート 3

「理科概論」

現代教育学科 奥田 俊詞

「理科概論」では、小学校理科の目的や方法及び内容の系統性についての理解を図ることを目指している。理科に対して「難しい」「嫌い」といったマイナスの印象をもつ学生が多いのが現実である。その原因を学生の「力量不足」と決めつけることは適切ではない。なぜならば、多くの学生は「理科が難しくくてできない」のではなく、「理科の学習をしていない」のである。本学の教育学部に入学する学生のほとんどは、高等学校で文科系のコースを選択しており、生物、化学の選択者が多く物理、地学はほとんど学習していない。中学校までの学習内容が、物理・地学分野の基盤となっているのである。その中学校までの学習は、定量的な扱いをせず、定性的に学習をすることで概念形成を図ることが中心になっているので、計算を伴う学習展開が極端に少なくなっ



いる。学生が、「理科の計算が全然わかりません」というのも仕方ないと感じてしまうのだが、将来教員として指導するときに、自分の苦手な分野に消極的になられては、理科教育に対して負の連鎖を作ってしまうことになりかねない。

そこで、教科の概念や指導に関する内容を前半に集中し、その後の講義では、小学校理科の内容についての系統的な理解とともに、学生がもつ理科に対するイメージを好転させることを目的とした構成にしている。具体的な取り組みとしては、講義のはじめに行う小テストと興味・関心を高める教材の工夫である。

小テストについては、前回の講義内容を確認するための問題を基本用語の確認と計算問題を中心に作成し、最初の15分間で行い次回の授業で返却する。返却する小テストの裏には解答例と簡単な考え方を印刷しているので、各自で復習することができる。返却は、小テストを学生が受けているときに、巡回しながら机の上に置いている。座席指定であるので事前にそろえておけばテスト終了までに返却でき、時間が有効に使える。授業の進度に応じた問題作成と採点を毎回行うのは楽ではないが、学生の理解度を毎回確認できるので、自分の授業改善に役立つことと、個々の学生の意欲が把握でき、早い段階で個々に指導できることは大きなメリットである。

興味・関心を高める教材については、できるだけ、授業内容にかかわる簡単な演示実験を行うようにしている。実験室ではないので、できないことが多く、映像を見せることが多いのだが、できる限り生の現象を見せたいと思っている。それは、現象の理解が目的ではなく、学生の心の中に驚きや感動を起こしたいと思っているからである。私見であるが、理科の知識を持っていること以上に、理科（自然）を知りたいと思う心が、教員にとって大切なことだと考えている。自分が本当に知りたいと思うことは、自

分で身に付けることができるし、何より、その教員は学ぶことの素晴らしさをこどもに伝えることができるからである。この姿勢は、私自身も持ち続けていきたいと考えている。まだまだ、学生の心を揺り動かすまでには程遠い現実を自覚しながら、今後もネタ作りに精進していきたいと考えている。

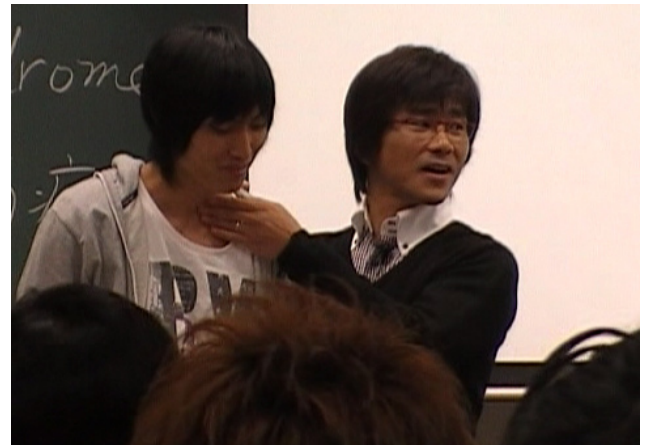
レポート 4

「物理療法学」

理学療法学科 庄本 康治

今日は物理療法に関係した浮腫の発生メカニズムについて講義を実施した。組織液の循環、リンパ節、筋収縮との関係、静脈循環についても講義実施した。その中で、「圧迫」を加えていく物理療法、適応と禁忌についても講義した。症例の写真なども使用しながら実施した。

また、赤外線、紫外線といった電磁波の物理学的特性、治療の適応、禁忌についても概説した。特に赤外線治療で関係している complex regional pain syndrome についても概説した。



※研究授業の様子はビデオ映像で見ることができます。Kio-officeの「FDinfo」—FDに役立つサイト—toにリンクがあるので、希望の授業名をクリックして下さい。

「USBフラッシュメモリーの管理」について



パソコンのUSB端子に差し込むだけで簡単にデータを移せるUSBフラッシュメモリー（以下 USBメモリー）が重宝されています。メリットとしてコンパクトにデータの管理ができますが、デメリットとしてウイルス感染の危険性・紛失盗難による情報漏洩などの心配が付きまといま

す。そこで、今回はUSBメモリーを安全に使うための注意点などについてのお話です。

A) デメリットに対する考慮

(1) ウイルス感染の危険性

- ウイルス検索チェックを定期的実施し駆除・隔離などの処置をする。
- ウイルスに汚染したPCに差し込むだけで感染し、そのUSBを介して侵入するウイルス（Mal_Otorun2など）被害が多く発生している。
- USBメモリーを挿すと同時に自動起動してウイルス感染を仕掛けるタイプがあります。
- 拾ったUSBメモリーは絶対にパソコンに接続してはいけません。「落とした人が困っているだろうから、内容を確認し所有者が分かれば届けてあげよう」と考えない方が良いでしょう。（毒入りかも？）

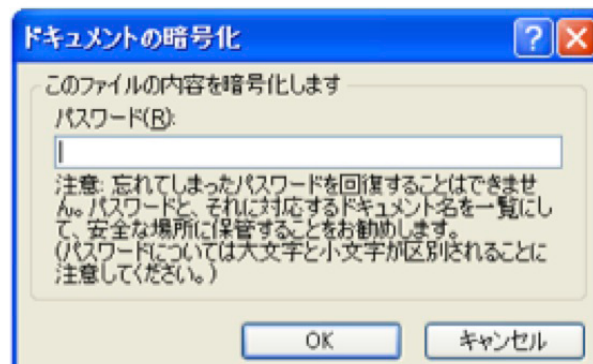
(2) 紛失防止策の工夫：

- 目に着くよう大型で派手な目立つストラップを付ける。
- 出来うる限り持ち歩かない。（安易にポケットに入れない）
- デスク等に無造作に置かない（放置）しない。
- PCに突き刺さったまま忘れない、離席／帰宅時にはメモリーを失っていないか確認する、など徹底した意識管理に心掛ける。

(3) 情報漏洩対策

USBメモリーをなくしてしまい第三者に不正使用されたら大変です。

- 不正使用防止として、セキュリティ設定機能付のUSBメモリーを使う。（セキュリティソフトをインストールしたPCしかアクセス出来ません。）
- ファイルにアクセス出来ないよう、簡単に見破られないようなパスワードを付ける。
- プライバシーにかかわるような重要なデータはUSBメモリーに保存しない。
- 危機管理分散として、可能な限り小容量のタイプを選択することも一考です。
- Office 2007（例：Word、Excel、PowerPointなど）はファイルデータを暗号化（パスワード設定）して保存する。



B) 参考：

ファイルデータのパスワード設定手順を載せておきます。

データの暗号化は、例えば、Wordなどはファイルを開き、「ファイル」→「配布準備」→「ドキュメントの暗号化」からパスワードを入力しOKをクリックするだけです。（上図参照）

次回、開くときにパスワードを入力する必要があります。

C) その他：

1. USBメモリーに保存したファイルを消去した場合、パソコンの「ゴミ箱」にはファイルは残りません。慎重に削除してください。
2. USBメモリー特有の問題として、データ保持期間、書き換え可能な回数がある仕様があります。
例えば、データ保持期間5年とはパソコンから外して5年間放置した場合、データが電氣的に消失する可能性があります。

「アグリライフのすすめ」

宮崎 猛 編著

2002年 家の光協会

アグリライフとは「agri（農業の）-life（生活）」を意味する。本書は一言でいうと「農」の素晴らしさを紹介している書である。昨今、農業ブームで「農」が見直され始めているが、かなり前から「農」がもたらす様々な効果、魅力に気が付き、都市農村交流によって都市部のヒトにもその恩恵を享受できることを提唱されていた。

私は大学時代に本書の著者や本書との出会いの影響で、アグリライフを大学時代に始めて11年、今も妻や大学時代の知人達と続けている。場所は京都府舞鶴市西方寺平。この場所は本書でも紹介されている。舞鶴市の北西部の赤岩山の中腹にあり、国道から山道を抜けたところに存

在する集落である。そこには山の斜面を利用した棚田が多く、農村の原風景が広がる。過疎化と高齢化が進み、集落戸数は11戸、人口29人で高齢化率は41.4%である。とんでもない僻地を想像されるかもしれないが、そこには豊かな自然、活力があふれ温かで、開かれた心を持った人々が存在し、棚田オーナー制度や農業小学校などを先進的に実施し、都市部の人々を受け入れている。



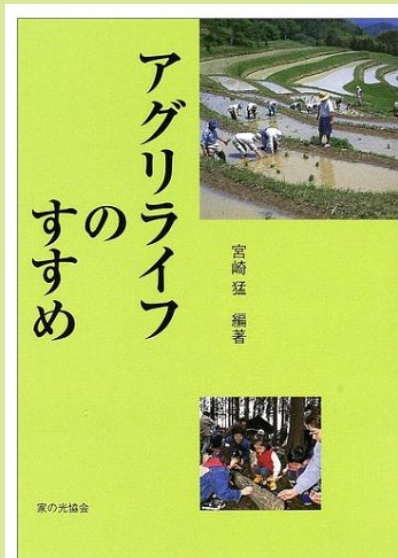
機械の入らない棚田で、春の自分の手による田植え、3週に1度の草取り、夏祭り、秋の稲刈り、稲木干し、収穫祭（左写真）という一年を経験することができる。自らが口にする食物を自ら生産し食べるという命を支える上で非常に根本的な営みを通して、「農」と「食」とのつながりを実感している。四季により移り変わる美しい景色、無農薬の田んぼの草勢、多くの虫たち、台風の脅威など自然を肌で感じる。何よりもここでの魅力は地元の温かい人々とのつながりである。小さな子連れで参加される家族もおられ、教育効果や家庭内の交流を促す効果も大きい。私も訪れる度に、農作業で疲れ果てるのではなく、

不思議といつも心から満たされて帰ってくる。つくづく「農」には多面的機能があることを実感させられる。

「理学療法学科の私がなぜ農を？」と不思議に思われた方もおられるかもしれないが、あたりまえのことの素晴らしさを肌で感じることができるアグリライフは、全人的復権を目的とするリハビリテーションの専門家としての私の原点でもあり、今後も継続していきたい。

（西方寺平ホームページ：<http://www.pref.kyoto.jp/syokuiku-spot/1226630444708.html>）

（健康科学部理学療法学科 岡田洋平）



◆編集後記

●以前は、大学生ならノートの取り方は自分で考えるべき—とっていました。科目によっても先生によっても、また学生の勉強の仕方によっても違うはずだからです。最近、ノートテイキングと称して指導する大学が増えてきました。しかし、市販本を見ても大した内容は書かれていません。そこで、他の先生のまねをしてポートフォリオを学生に作らせてそれを評価することをやってみました。自主的に調べたり、予習復習をしたことがわかるように整理すると高く評価すると宣言したら、学生の個性がはっきり出ておもしろいノートを作ってきました。ポートフォリオが畿央大学の一つの学びの文化になるかもしれないと感じた瞬間でした。（渡）

●保育所実習の訪問指導の際、園長先生から「これからは保育所も大きく変わらなければならない。そのために4年間しっかりと保育や教育のことを学んだ4年制の学生を取っていくことを考えている」とのお話を伺いました。ほんの2年前には「保育所では4大卒業の学生を取るメリットはない」と言われていたのに大きな変化です。現場では、実践につながる理論を学んでいる学生を求められているのです。実学中心の畿央大学だからこそ、理論が中心の授業であっても実践が見える指導の工夫が必要なのだ—と実感しています。（WEST）